

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

中国におけるデューイ教育思想の受容とその変遷

氏 名

劉 勝男

論 文 内 容 の 要 旨

「中国におけるデューイの教育思想の受容と変遷」の要旨は以下のとおりである。

「Ⅰ. 主論文の目的」、「Ⅱ. 主論文の構成」、「Ⅲ. 主論文の具体的内容」と分けて述べる。

Ⅰ. 主論文の目的

アメリカの教育家、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) は、アメリカ史上の大転換の時期に、学校に対する社会のチャレンジと需要を真剣に考え、伝統教育の理論と方法を批判し、更に、シカゴ大学初等学校の教育実験を行った。彼は長い教育家生涯の中で、現代教育についての探求を続けると同時に、教育に関する大量の著作と論文を書き、欧米教育理論と実践に大きな影響を与え、欧米教育の巨匠としての地位を固めた。

デューイが 20 世紀のアメリカ、更に世界中で最も影響がある教育者の一人であることについては世界に知られている。その理由は、彼が確実に教育に大きい影響を与え、また、教育領域に重要な変化をもたらしたからである。デューイはしばしば人に誤解され、1950 年代にも他の人からの批判を受けたが、60 年代以降、人々は彼の新しい教育思想に情熱を向け、もっと深くそして理性的にデューイの現代教育についての探求を始めた。80 年代になると、再度アメリカの伝統的な哲学思想の価値に人々の意識は向き、その中でデューイの学術成果も認められた。

デューイの教育思想は近代の中国でも広い範囲で認識され、彼は当時、近代の中国教育に最も影響を与えた欧米の教育者になった。デューイの思想、特に、教育に関する思想はアメリカ社会の特徴と状況を反映している。彼の思想は当時のアメリカ民衆の心理を最も総合的に反映し、アメリカの社会発展の潮流に答えてきた。社会変革後に形成された中国の政治、経済、文化と民族心理は、中国社会がデューイを受け入れる可能性を反映する背景となり、同じくデューイを排斥する潜在要素ともなった。

中国の教育は最初にデューイ思想を受け入れることからはじめ、デューイ思想を崇拝し、その後批判、更に再評価をしてきたが、その過程における様々な疑問を明らかにする必要がある。20 世紀初期、蔡元培 (1868-1940) が初めてデューイ思想を中国へ紹介してからこれまでに、中国学者によるデューイ

ーイに対する態度の変遷とともに、中国の教育界においてデューイについての研究には三回の高揚期が現れた。第一回の高揚期は1920年代から30年代まで、デューイの訪中前後である。その時期には、デューイの著書が大量に中国語に翻訳され、デューイの生涯と経歴、また、彼の実用主義思想までしばしば新聞雑誌に詳しく紹介された。中華人民共和国の成立後、1950年代に中国の教育界は激烈な「デューイへの批判」を行った。その批判の焦点が直接にデューイに自身に向けられることによって、中国教育の「デューイ研究」が第二回の高揚期になったことが示された。1980年代以後、改革開放の背景の下で、中国の教育は「デューイについての再評価」を主題として、第三回の「デューイ研究」の高揚期に入った。高揚期の後に反省があり、中国教育が如何にしてデューイを受け入れるのか、また、如何にして西洋教育学者の思想を受け入れるのかがこれからの中国教育界の課題である。

本研究では、中国学者によるデューイ研究を行われた際、現れた三つの高揚期、すなわち、デューイと彼の思想に対する態度の三回の転換期に基づき、研究を行う。1920年代の「デューイ伝来」から1950年代の「デューイ批判」また1980年代以降の「デューイの再評価」までの状況を分析する。これらの考察によって、現代中国教育思想界が如何に西洋教育理論を受け入れたのかを究明したい。

II. 主論文の構成

主論文の構成は次のとおりである。

目次

序章

第1節 本研究の目的

第2節 先行研究

第3節 研究方法と本稿の構成

第1章 デューイと彼の教育思想：アメリカから世界へ

第1節 源としてのアメリカ社会

第2節 世界の教育への影響

第2章 中国によるデューイへの影響の一考察

第1節 中国でのデューイの運命

第2節 訪中活動がデューイと彼の思想にもたらした影響に関する一考察

第3章 デューイと近代中国の教育(1912-1949)：中国共産党とデューイ学派の受容を中心に

第1節 中国におけるデューイ教育思想の伝播と研究

第2節 中国共産党におけるデューイ思想の受容：毛沢東と陳独秀の事例を中心に

第3節 学派の観点からみるデューイの教え子たち

第4節 方法論の観点からみた胡適と陶行知によるデューイ思想の受容

第4章 1950年代中国におけるデューイの教育思想への批判

第1節 中国創立当初のアメリカ教育とデューイの実用主義に対する批判

第2節 1950年代後半におけるデューイと実用主義教育思想への全面的批判

第3節 1950年代後半中国における実用主義教育学に対する批判の反省と評価

第4節 本章のまとめ

第5章 デューイと改革開放時期の中国教育（1977－現在）

第1節 「デューイについての再評価」の原因

第2節 「デューイについての再評価」の過程

第3節 「デューイについての再評価」が中国教育に与えた影響

第4節 近年の中国教育におけるデューイ研究の成果

終章

第1節 本稿のまとめ

第2節 理論的アプリケーション

第3節 今後の課題

初出一覧

参考文献一覧

III. 主論文の具体的内容

本研究では中国におけるデューイの教育思想の受容と変遷について考察した。論文は全部で7章で構成されている。序章では主に本稿の目的、先行研究の内容、研究方法などについて説明した。本論の第一章から第五章までは、論文の主要な内容である。

第一章では、デューイと彼の教育思想について紹介し、デューイの思想の根源および彼が世界の教育にどのような影響を与えたのかについて説明した。

第二章では、中国によるデューイへの影響について考察した。二節に分け、第一節では、中国でのデューイの運命、すなわち、デューイの訪中過程、デューイの教育思想が1920年代の中国で流行した原因および「デューイ熱」が冷めた後の中国とデューイを考察した。第二節では、訪中活動がデューイと彼の思想にもたらした影響について考察した。特に、訪中前後の「習性」や「個人と社会との関係」に対するデューイの解釈の変化などについて検討した。

第三章から第五章までは、中国における一世紀の間に行われたデューイ研究を振り返り、中国学者によるデューイに対する態度の変化に基づき、三回の高揚期について検討した。

第三章では、近代中国（1912－1949）の教育におけるデューイに対する受容、特に、中国共産党から見たデューイと彼の思想、また、デューイ学派によるデューイ思想の受容を中心に考察した。第一節では、中国で普及された主なデューイの教育思想について考察した。第二節では、中国共産党におけるデューイ思想の受容、特に、毛沢東と陳独秀の事例を中心に考察した。第三節では、学派の観点から見たデューイの教え子たちについて考察した。第四節では、デューイの教え子である胡適と陶行知について考察することで、この二人によるデューイ受容の特徴を比較した。この時期は、中国学者が主にデューイと彼の学説を学んだ時期であった。デューイと彼の学説を詳しく理解することのないまま、歴史的背景のために、中国を救う方法としてデューイの思想を捉えた。この時期のデューイ研究は主にデューイ思想を称賛し、学術的に批判することはそれほどなかった。また、この時期のデューイ研究は主にデューイの民主主義思想と平民教育に集中し、それ以外のデューイの学説に対して関心が向くことはそれほどなかった。

第四章では、1950年代中国におけるデューイの教育思想への批判について考察した。1950年代前

半と後半に分け、デューイの教育思想への批判を考察した。また、当時の中国学者によるデューイ批判に対する反省と評価を検討した。この時期、中国の学者たちはデューイを批判した。最初は学術的にデューイを批判する論述があった一方、より多く現れたのは、学術的ではなく、デューイ自身を批判する論述であった。また、学術的にデューイを批判する論述の中にも、政治に奉仕することを目的とした論述が多くあった。この時期のデューイ研究は、主に、根拠なくデューイを批判する時期であったと言えよう。

第五章では、1977年以降、デューイと改革開放時期の中国教育について考察した。「デューイについての再評価」の原因、過程および中国教育に与えた影響について考察し、最後に、近年の中国教育におけるデューイ研究の状況を分析した。この時期、中国学者はデューイに対する再評価、再学習を行った。改革開放政策によって、以前の学説をもう一度事実に基づき学問的に検証する時期であったと言える。デューイに対する再評価が行われ、デューイの数多くの著書が中国語に翻訳され、研究資料が増えた。再評価は、主に、1950年代におけるデューイと彼の学説に対する不正な評価を修正することからはじまった。この時期のデューイ研究はこれまでになく多岐にわたるようになり、また、詳細になっていった。デューイに関する研究著書が多く出版され、更に、修論や博論でデューイ研究を課題とする学生たちも増えている。

この三回の高揚期におけるデューイ研究に関するいくつかの特徴を指摘することができる。まず、デューイの教育理論についての研究は、各時期に最も重視されている研究となった。なぜなら、各時期において発表された論文は、デューイの教育思想についての論文が最も多かったからである。また、中国は中央集権国家であるため、各時期において、国家政策がデューイ研究に大きな影響を与えた。各時期の中国の学者たちのデューイに対する態度の転換も国家政策の転換により変更してきた。そして、デューイの理論体系についての誤解がしばしば現れる。1920年代において、デューイの原著はそれほど多く翻訳されなかったため、より詳しく客観的にデューイの思想を理解することが難しかったと考えられる。したがって、1980年代後半に入ると、デューイの思想についての再評価とともに、大量のデューイの原著が翻訳されることになった。

終章は本論の総括であり、一世紀以上の中国教育の「デューイ研究」についての反省についての考察である。「デューイ研究」が中国教育での変化に基づき、現代中国にとって中国の特色を持つ教育を作り上げる際に歴史を参考とすべきことを表明した。